

会議名称	県立中井やまゆり園改革アドバイザー会議
開催日時	令和8年2月2日（月）13時30分から16時45分
開催場所	西庁舎7階703会議室
出席者	渡部副議長、大川委員、小西委員、隅田委員、野崎委員、上野委員、高原委員、中西委員、名倉委員、羽生委員
問合せ先	障害サービス課 支援改革グループ
会議概要	以下のとおり

【議題1 福祉的な検証結果のとりまとめ】

- 正式な記録とそうではない記録の違いは何か。場面によって、報告内容が変わっている印象である。
- 不都合なことを支援という言葉で丸め込んでいるように感じられる。
- 入所段階での目的や目標の共有は、土台が弱かったというより、そもそも、そうした考え方や発想がなかったというべきではないか。
- 元気だった頃だけではなく、利用者の日頃の様子をしっかりと把握して、それを正確に医療に伝えることで、正しい診断が得られる。
- 「家庭看護」という言葉は、医療ではもうあまり使われていない。身内に対する気遣いといった言葉に替えた方が良い。
- 「福祉モデル」という言葉も一般的ではなく、具体的な表現に替えた方が良い。
- 人によって受取り方が異なってくる多義語が多い。定義付けが必要。
- 本庁は、指導監査だけでなく、助言やサポートを行い、園と一緒に利用者や家族の豊かな生活を考えて進めていくことが十分でなかった。

【議題2 アクションプランの評価について】

- 「達成度を表す指標」とあるが、どのような指標が設定されており、どのような評価がなされているのか。例えば、5段階評価といった表し方があるが、アクションプランの評価がどのようになされているのかわからない。
- アウトプットとアウトカムが混在している印象。成果としてのアウトカムは利用者目線であるべきあり、それは利用者の暮らしがどうなったのかではないか。そして、その評価のための情報源は、本人や家族の声である。それが弱いと利用者目線ではなくなってしまう。
- 利用者が実感できる成果で評価してほしい。利用者が成果を実感できていないのであれば、取組が進んでいるとはいえない。
- 数字だけで評価することは適切ではない。利用者の人生を預かっている以上、項目によっては0か1といった評価軸も必要ではないか。
- それぞれの取組の目的を明記する必要がある。本来の目的を達成しているのかということを考慮しないと、よくわからない数字だけの評価になってしまう。
- 当事者目線の人材育成は進んだとあるが、研修への出席率が低い原因が考えられておらず、人材育成ができていないか疑問がある。